二十一話　きつねのあねさま

むかしあるどころに、百姓してえた父あったけど。あるどき、山さ薪取にえったけど。一生懸命、稼せで薪もとえだし、晩方には少しはやえども、家さいぐべがなと思って山おりできたけど。薪、背中さ、じっぱりしょって「どっこいしょ、どっこいしょ」と、山おりできたば、道ばたから、わっづかはなえだ木の下にきつねっこえて手前のからださ、木の葉っこ「ぺたぺた」とねっぱらかしていたけど。父でなにしもだべがなと思って、かぐえで黙ってみていたば、木の葉っこしばらくねっぱらかしていたけども、それを止めたべがなと思ったば「くれっ」ととつくりかえったど。したばきれいなあね様に化けたけど。

したばきつねが化けだあね様「したした」とおこうのほさ歩いるめえ食うにえったな。みんなさおしえて、だまさえねえようにしてやれど思って、そこの家の「ほえどかぐし」のどこまでえって「ほえどかぐし」のどこから、面っこだして、「そのあね様、きつねだはんてえ、騙さえるな。」と叫んだど。

「そのあね様、きつねだはんて、騙さえるな。」って何回もさかんだど。

なんぼか時間、たったんだか、したば後から、「おえおえ、うがなにしてりゃ」と肩、たたくものあったけど。父あ「おい」と思って振り向いで見たば、隣の父あ、後さ立って笑ってえだけど。気ついで今度よく見たば、振舞さきた人も、どこさがえってしまんだが、だれえもえなくなって「しーん」と静かになっていたけど。そしたば、父あ死んだ馬のケッツさ、面おっつけで叫んでいだおだけど。

きつねというやつ、人騙すから、きつねさはしじがるもんでねえど。どっとはらえ。